重修真書太閤記

十編

二

へ13
459
92

特13
門
號 459
巻 92

消 稿 兼

重修真書太閤記十編卷之四

秀吉卿大納言任官の事
并木多平八郎忠勝意見の事

天正十二年甲申ハ漸飯妹の二卦ゑ當る年ゑ〳〵と即三十二周の中元己亥天文八年ゑう四十六年ゑとへ太歳ハ申方太陰ハ子方害氣申の方ゑ泊と害氣の泊とる処その害くゑくゑ〳〵と云う實ゑるゑゑ津川玄蕃允ゑ長嶋城ハ清洲の城の坤ゑ當る即害氣なゑう内府信雄公ゑゑと殺〳〵ゑゑ〳〵ゑう車起ゑ畿内東國静謐ゑゑ〳〵別〳〵と尾州勢州濃州ハ戰

同攻會印

塲とあうしうハ百姓地下人耕作の業と安んをる
こと能ハゞ諸職商人通功の路塞り老若男女巷ゑ叫
ひ鰥寡孤獨窮と告る処なく朝暮悲歎の聲絶る里
あうりけるとと秀吉卿ふう〳〵あこれらをひしたう
く無事の謀と廻らされまつ三州御陣へ書翰を呈
して四海太平の始と開うんとと誥奉りまゝ北畠
殿と諷して和談の扱と入けるゑ北畠殿元ゑう強
て秀吉卿を殺戮きんとも思召さゝ〻ハ神速ゑ其
事調ひ十一月十一日勢州桑名郡矢田河原ゑ於て
和睦の對面あうその式嚴重ゑして短き筆ゑ盡を
へきゑあゝ祢ともその荒増とゝゝゑ記を内府の

御座へ東ゑう西ゑ向て龍鬢二帖と敷その上ゑ纐
纈縁の板帖御左ゑ鋏刀木の御刀掛御後ゑ御持筒
御持弓御矢籠とゝく有へき様あう御座ゑう少し
引下う小紋高麗の縁付し帖北ゑう南ゑ向て東西
へ三帖敷て進上物を居あうへきう御座の對ゑ大
紋縁の帖二帖敷その上ゑ虎の皮の敷皮敷たるい
宰相秀吉卿の座あうとと聞えさうその日午の刻
ゑ秀吉卿參上儲の幕ゑ入ゑへハ内府腰輿ゑて御
出あう亭主の幄ゑ着ゑひ互ゑ楽内あうて出御其
座ゑ着ゑへハ秀吉卿進上の太刀足立清左衛門尉
是を披露しまゝ内府ゑう國次の太刀を下さる同

〻く清左衛門尉是を傳ふ後ふ人々申けるハ國次
ハ國續あう續へさ國と渡〻ふうとてさとやと
判〻つ〻ひそめさ合けるうてさ〻ておのひ合を
る末の姿のく〻めと今日七関さるふ同十六日ふ
内府公も清洲へ還御るとい秀吉卿も大坂へ帰う
るひ畿内静謐〻て四民万歳と唱えけるい洛中洛
外歓娯の聲九重の雲上ふ聞え偏ふ是参議秀吉卿
肺肝と砕さるひ〻力ふうれうと感感ふとふ浅う
らび褒賞の朝恩なく〻ハ帝澤の至らさるふ似さう
とて臨時の陣議あうて秀吉卿官位昇進の御内意
ありけるい勅使大坂へ参向あう秀吉卿う〻ひ〻

〻ひうて勅使と城中へ迎へ奉う種々の饗應
山海の珍膳と盡〻引出物の数々綾羅錦繍金銀珠
玉ひううはゆさ迫るう〻うハ傳奏のちくろふ
さそも〻大量ふる秀吉うふのうる人天下の權と
執るひたらんふハ世曳冨貴ふ上下安樂の時と得
へ〻とたのられけう然御内意ハ内大臣ふ上らと
るへとあうけると秀吉卿以の外ふ仰天〻謹て申
ける様ふれハ勅定の御答ふひて〻秀吉う心の中
と申ひふう秀吉ハ邊土遠境の地下人の家ふ生と
てひへハ耕鋤とるとい〻さ〻心得てひへとも冠烏
帽子笏中啓履草鞋の差別とハ辨不申ひ併官ハ位

に従ひ位い人の品に従ふとうや承そうそい然い
中小将と經て衛府の督に進み左右の大将を兼て
大中納言に昇う大臣に登る其例常のとう又い參
議より納言に進み大臣にいたる共云う秀吉いや
しくも朝廷の御光にあうて末代陵夷の弊風と改
めんと欲をいうんぞ我身より越轉僭上の例をふ
し申へき抑大臣に昇進存もあらしい因て勅使に
従ひ上洛仕り參内し勅定の御請と申上いたくい
とて直に上洛あり傳奏その由を奏聞をし処秀吉
い武畧よの常に越しのみあらしび禮義とも存しけ
るとや是蓋禁闕の重寄天下の儀形此人あらそい

と宸襟にあるも穏やうに四海の太平眼前おらんと
感たくひかりけるあよう十一月廿二日従二
位に叙せら止權大納言に任じむふ秀吉卿辭退再
三に及ひしかとも御聽おろうしいはきおきち御
請あり鎌倉右兵衛佐頼朝卿ハ參議中納言を經を
直に大納言に任じ玉ひし先例に寄をふふるへ
し然るに秀吉卿をそなに亞相に任じ玉ひいに
に四海静謐四民鼓腹の王化を施しむらんため
弥三別御所と和議と調へとんいわるへうらびと
あのとまりけるにより北畠殿へ此事と申をを
しうへ北畠殿十一月十四日にるる濱松に參向あ

りて酒井與四郎重忠の家を旅宿となさしめさせて登城ありまづ御加勢として御出張ありし御禮を申さんとなしけれハ御所にも深く御悦ありて十五日内府饗應の為濱松城下諏訪の社頭にして神事流鏑馬を興行ありその後射手の面々各々堅物遠射のの藝を施しけれハ勢州尾州の侍いつれも舌を振ふて感じかりけりやかて城中に於て御酒宴をとふる丁寧を盡されしかハ内府もふかく懇志を悦ひ玉へり然後内府申玉はく此程御加勢として御出陣秀吉と弓矢に及ひ玉ひしを返々も辱ふく悦ひ入て候但それより以前ハ秀吉と御所と何

の意趣もおハしまさゝりしに信雄か事によりして何となく秀吉もかしこまり入て候なるにそれ信雄に御芳志候如く秀吉にも同し様にそ賜ちり候そて幾重にも悦ひ入候条秀吉かくて申て候秀吉年たけて五十にちかく候へとも子息と申ものなく朝暮心さひしく罷在候御和親の上ハ秀吉に於て更に別心を存し不申しるしに御息一人養ひ奉り家督とゆつり申へきまて候と呉々懇に申て候御同心候そて辱なく存候と内府厚く取持玉ひけるにより御所にも別に思召もあらせられ候ハ秀吉御の申さるゝ旨に従せられ今年十一歳に

なりゐるに於義丸とのと大坂へ上をゐるへき趣と約束ありしに内府も喜ひゐるそのゝち秀吉卿へ申されけるに秀吉卿も又濱松に御納得ありけるとを喜ひせらるゝ内府へも懇ゝ情いくゝの禮義を述らるゝ太刀馬等を贈らせゐひけて後濱松へ使者を下されし十二月上旬於義丸殿濱松城首途ありて十二日大坂に着ゐる石川伯耆守數正ら次男勝千代本多作左衛門重次ら次男仙千代御供ゝたりし廿一日於義丸殿元服ありて従五位下に叙ゝ侍従に任せられしかい羽柴侍従秀康と稱ゐ御領ハ河内國にて一万石あり

流布本に信雄公より瀧川三郎兵衛尉勝雅を使としゝて濱松に差下され信雄の口状を述て秀吉所望の次第を諭説ありけるに三州ゝて評義ありそゝ去年八月一戰のゝち秀吉の仁慈にて帰國まゝ駿州へ軍馬を出され北条家亂入の防ときゝ中旬より十月まて待をゐひしかとも敵つひに來らさりしかハ今ハふゝひ尾州へ御出張秀吉と約束の合戰あるへきと思召ひ處信雄と秀吉と和睦ありて彼あるゝ静謐せしむる

より尾州へうつ告来りうつれハ三州御所のくも尾州御出陣ハ及くべとおもへ〳〵めさるへとあり此条偽なり八月中旬より十月迫駿州へ御出張と云こと全く虚説あり七月十三日より清洲へ御座ありて八月廿七日ハ松平主殿助家忠秀吉卿の兵と伺ふて樂田ハ至る廿八日秀吉小堀ハ放火を御所清洲へうつ岩倉ハ御出張主殿助樂田ハ苅田ハ廿七日御所まゝ清洲ハ還御十月四日小牧の要害御修復十七日濱松還御十月九日まゝ清洲ハ御出張あり十一日信雄公と秀吉卿と和睦も御所へ〳〵めうつ知食つるとなりうつ即日石

川伯耆守を御使とゝて秀吉へ和睦を賀〳〵ありハなれハ流布本の説更ハ取ハたる処なゝ去天正十一年七月下旬濱松の督姫君小田原へ入御ありて北条氏直と婚禮とゝのをもひつるハ北条と駿遠三ハ親睦の國なゝて決ゝて尾州御出張の留守を伺ふといふとあるへうゝ然らハ又軍馬を出ゝあ理ふゝその上信雄直ハ濱松ふ來る瀧川三郎兵衛を使とをゝハあゝ次ハ酒井榊原大久保本多等ゝふいハ信雄ハ信も義なゝ人なう軍とハそゝ我君ハまうを置あうら和睦とい心のまゝハ取行ひて相談ハ及そ

その上ゝ秀吉のためゝ若君と取次て養子とを
んとゝゝと又俗ゝ尻頭ゝそのゝゝと云譬ゝ
似さう自身難義の時人とたのゝ自身樂なる時
人と外ゝとゝ又信雄ゝゝゝ従て若君と大
坂へ上をゝそゝ人質と送うゝゝと同ゝと申て
あれと止め奉らんと諫めゝと本多平八郎忠勝
本多佐渡守正信二人ゝゝ何ともいゝ御所
の仰み忠勝ハ腹心の功臣正信ハ万事を談ゝ
補佐の臣ゝうと有ゝと云り正信いまゝ佐渡守
ゝ任せゝ其上ゝ天正十年歸參せゝのゝゝて
まゝ暇近の列ゝいらゝ何ゝぞ補佐の臣と仰ら

ゝへさうゝ忠勝秀吉の武威さうんなる上只今
官大納言帝都守護の大臣ゝうゝゝゝゝゝ叛さゝゝゝ
と御家長久の策ゝあゝゝと申て於義丸との上
坂のゝとゝゝめ奉うゝゝゝゝ御所元ゝうゝその思
召ゝうゝゝゝゝゝゝ事決ゝゝたうとゝゝゝゝ是まゝ
本多家の譜ゝ傳へゝ信偽決ゝゝゝゝ
浅野堀尾等濱松へ使者の事
并於義丸殿秀吉の養子とゝうゝゝゝ事
羽柴權大納言平の秀吉卿ハ内大臣信雄公の返辭
と聞ゝゝ三州と和睦ゝゝのゝゝよろゝひのゝか
らゝ於義丸殿上坂ゝうゝハ日頃所望成就をゝ

とて大に喜悦あり抑との於義丸どのと申ハ三州御所の庶子にして天正二年二月八日遠州濱松産目村にて誕生あり母ハ池鯉鮒の社人永見志摩守吉英ら女なり一ハ村田意齋といひしものの女ともいへり本多作左衛門重次の家に養育ま ひしと三歳の時岡崎三郎信康君とりのきをむひらめて御所の見參に入あひしき然由あるとハ五歳にあるをあ長丸君とうきて於義丸とのと上をあひなり秀吉卿於義丸とのに對面ありてその面さしの猛く眼光うありて進退の雄々しきと尋常の兒の類にあらずと見あひ實三州御所の

御息あり秀吉ら嗣とあるとに堪たりと深く重んじあひ自身立て御手を取奥へ伴あひあひしかハ朝日との并に北の御方うとうとに近く呼をえ長途のつかれとなるさめあひゆゆしく御めてあるの御膳の御給仕に加藤虎之助福嶋市松と二人伺候したるとて御覽して勢高きハ何と申ぞと仰られしに加藤虎之助と名乘しかハうつをあひ次に大うたるハ誰と仰らる福嶋市松と答奉りしかハ心得あひ直に虎之助如斯をに市松まろう出るあと元あり仕なれたりしものと同列にめし仕ひあひしかハ秀吉卿舌と振ふてあそろ

おそろしき日本一の大将軍たるべきことめでさせ給ひしとなりうけて秀吉卿より遠州へ御使し浅野彌兵衛尉長政堀尾茂助吉晴と下さるべき旨定めらるべしとの両人於義丸とのへ參り遠州へ御使して下向仕りし別の御口状と伺ひ申て參りしかくやと申さしめ時於義丸との折ふし弓射ておとさしう片手矢くひて彌兵衛茂助たしかに承られ羽柴於義丸のことと濱松とのへ申べきと父い大納言殿より外よりあるべき様やあると宣ひて直に的に向てをるべき両人と見向もしむとて両人い濱松へと申たらんにい涙くくもしむらんにうの然らば何とういひおくらへまゐらせと心組て出たりしに案の外ある事にとて大納言殿へ參りてうくと申たりしかい秀吉卿よりも頼のしき子息得たりとしきりに厚くのたまひしなりその夜朝日殿於義丸どのとよひ居て濱松へ彌兵衛と茂助と下しい誰にても御使と遣されて御手あれ調度ふとの彼処にあると取上を給ひてんやと仰られしと於義丸との熟聞食て大方様いかにかくの事と仰らるるのうか於義丸い大納言とのの御子すと大方様の孫にあい濱松あるといふ処に親しきものもいとない手馴たる調度あんとあるひもあらばい

わ〳〵さのゝい大納言とのへ申へくいとゝひあう
ら朝日殿の御膳と枕すゝそうとくと寐入るふぞ
うゝも幼ゐ〳〵とて朝日殿も北の御方もいと〳〵い
とゐ〳〵さのゝゆ〳〵へうとなう濱松へ淺野彌兵
衛尉堀尾茂助參者をゝうゝつゝ諏訪の神主扶浦
う家と旅宿とゝて種々ゝ馳走あう其夜大久保次
右衛門忠佐と御使ゝて長途の旅行恙なく是ずて
參向あう〳〵と祝着至極の由と演說ありて酒肴と
賜ゝ〳〵旅の疲も退ず〳〵氣の毒ゝゆへとも明日
面會とゝく〳〵ゆ由と申をとのことゝゆと申述明
とい城中ゝ請〳〵家老の面々何も出會てのち頃て

御所の御前ゝ召ゝ懇情と盡され〳〵うとも事終て
退出ずゝ於義丸殿の車うゝそゐゝも仰出さるゝ
事ゐ〳〵彌兵衛尉茂助ゐう於義丸どの御勇〳〵れ
ゝ〳〵ゆゝと申出たゝ〳〵ゝ御所仰ら出〳〵ゝ於義
丸とう申子息ゆひつゝとも外へ養ゝれなゝゝ我
等ゝ子ゝあ〳〵ゝと仰られて其後ゝ何とも仰ら出
ゝ両人ずゝとゝゐ〳〵なゝゝ車申出たゝ〳〵心知〳〵ゝ罷
退ゝ扶浦ゝ家ゝ皈ゝつゝゝゝゝ又御使ありて太刀馬
鞍なゝと賜ゝう夜明ゝゝゝ御使鷹と手ゝ居ゝ〳〵參
う此ゝ隨分秘藏の逸物ゝゝ鶴と捉ゝて慰ゐゝと
て賜ゝう其日一日狩〳〵〳〵獲たる処の鶴とゝゐ

雁とのゝをて浅野と堀尾ハ大坂ゟ立帰り遠州ゟ
ての首尾と具さゟ言上しけるハ秀吉卿も深く喜
ひあひ濱松ゟて左様ゟ其方ともとめくなるあし
んとハ掛ても思ふこゝろしなり秀吉直ゟ下向した
らハ倍〳〵て奔走をるあゝん去ゝても當世浮ゝこ
き大将ゝかその上ゟ於義丸の事と何ともいとれ
さるゝと親も親ゝ子も子なりゝとて厚く感心しゐ
ひけり兎や角やしゝて天正も十三年ゟなりぬ大納
言秀吉卿今年ハ五十歳ゟなりゝゟ主上深く内裏
守護の勲功と感し思召三月臨時の除目行られ秀
吉卿正二位ゟ叙をゝゟ内大臣ゟ陞りゝゟ今まて

平朝臣たゝ〳〵ゝ藤原朝臣ゟ改めゝゟ此時關白ハ
二条前左大臣昭實公三十歳太政大臣ハ近衛前關
白前久公秀吉公と同年ゝり左大臣ハ近衛信尹公
廿一歳右大臣ハ今出川晴季公四十七歳ゝり
因云信長公御事ゝり〳〵後内裏の御料ゝところ
ぞ〳〵〳〵さゝけるゝゝ女中達川端道喜ゝ褐
布直垂ゝとちゝゝさ賣ゝ參るゝと待てめしけると
ぞゝて道喜ゝさゝぬとゝて時ゝつるまて
參らぬ時ゝちんいゝるゝゝゝゝと仰られけ
るゝいつとなく〳〵うて粽のことをちん
といひ又のちゝハ餅のことをいふとゝゝゝふ

うつさる由緒ゑのう道喜ゝ家と御垣の外ゑ置ゝ〜ふうと道喜うめさうゝへうゝ信ゑゆ

重修眞書太閤記十編卷之四終

重修眞書太閤記十編卷之五

諸國之大名秀吉公ゑ隨順の事

并佐々木義郷召出事

羽柴内大臣秀吉公濱松御所の御子於義丸とのゝ養子となり和睦の親と厚くなり あひしらふ東海道ハ伊賀伊勢志摩參河遠江駿河甲斐すて東山道ハ近江美濃飛驒信濃ゑ至り北陸道ハ若狭越前加賀能登の四國平均したりしかとも濱松御所さうゑ於義丸殿と子とし あそび一旦秀吉ゑあとえさゝハ我子ゑあらびゝ人の嗣子ゑり死生共ゑ我與る

処々あゝしと切てくるゝ上ー御心中と聞人耳と驚
かー侍りさ又於義丸殿いまゝ幼稚の心ゆゑ道
理ゝさゝ〜然も其氣猛く其勢ゆゑ勝ゝゆゑ尋
常の類ゝあゝ〜伏見の馬場にて内大臣殿の近習
等と共ゝ馬と騎ゝけるゆゑ近習衆馳ちうひさゝ於
義丸とのゝ失禮ーたりとて於義丸どの抜手も見
をゞ切て落ーゆゝ外の近習衆こい不思議いうふ
ゝい内府の御家人と於義丸どの〜心ゝ任をて討
とゆふぞといさまつ〜取圍んとをると見ゆひ
馬うけ居ゆあいうゝ内府の御家人たゝんのゝう
於義丸ゝ失禮ー手討ゝなゝうーとあ〜心得違ひ

於義丸恨むうと仰られーうゆいつゝも道理ゆれ
へロと塞てうゝゆ居たれい事い即静まうぬの
ちゝ内府このゝと聞召何とも仰られど能々心得
て慮外るをゝと諭ーゆひ未たのゝーさ大将軍と
喜ひゆひ然い秀吉う先鋒とーて西海征伐南海退
治の元帥と得たる上い四國九州のゝて迫もあつ
使者と馳て朝集と勧むへーとて土州の長曽我部
九州の大友嶋津伊東龍造寺松浦大村有馬等の人
人と勧誘あういつゝも秀吉いゝ大臣ゝ昇進の上
い朝廷の權要當路の将相といひつべー誰う其命
違ふへ〜ゆとハいひふう〜海陸遠く隔たうてい

心よせさることも多く中にも中國の毛利輝元
朝臣は十餘州の大將なるに日本無雙の大名なる
のみならず吉川駿河守元春小早川左衛門督隆景
兄弟なる兵を練武を講じ民とあるれを政に私ふ
けるいふれと梅はたとへ柳はふとそなへて國人の
いとゝ尊ふこと類ふ然るに元春隆景秀吉
の軍を治めるに尋常ふ〳〵ぬことさとう此人と
中違ふていあしくうふんとて元春の三男吉川民
部大輔經言に小坂越中守二宮左助と差添元春の
名代とし隆景の弟小早川藤四郎秀包に桂民部大
輔浦兵部丞と差添隆景の名代として大坂に登せ

ゐる海上順風穩やかなる坡の浦に著しうへ秀吉公
より蜂須賀彦右衛門黑田官兵衛を使として遠路
參上と勞ひ吉川と小早川とは堅法寺に小早川と玉蓮寺
に旅宿さを翌日大坂の城へ登とい秀吉公面會懇
意と盡されしのち山に猟海に漁とりける珍膳美
味をべく有とあらゆる鮮肴撰ひ新を挙て饗應の
丁重なるに筆にも詞にも盡されを其後秀吉公吉
川小早川初四人の老臣等を引連十四五許の小女
に太刀持せ天守にのぼりて四方を指さし あれは
淡路嶋是は四國の山形に此方は攝津國あるさを
丹波美作播磨備前と細やかに告教へ其後經言を

をハ藏人ゟ補し下國の暇浅下され秀包ハ大坂ゟ
逗留せさせ玉ひゟ如斯て中國平均せし上ハ天
下泰平遠ゝらしと編戸の民皆其徳を仰きそう次
ゟ秀吉公の弟小市郎秀長の美濃守或大和紀伊の
両國の守とかし從三位ゟ叙し權大納言任し大和
大納言と稱し郡山の城ゟ居しむ大和國ハ元來筒
井順慶法印の國なり息ろ去天正十二年八月法印
卅六歳ゟて早世ありて實子なし養子定次實ハ順
慶の叔父左門順國の子なり依て是を伊賀國主と
かし三万石を加え從四位の侍從とあられしなり
又三ゝ好孫七郎秀次とも秀吉公の養子として羽柴

孫七郎と稱をし從三位の權中納言となり江州
の國守とかしゝうハ安土の城とゝの町家と八幡
ゟ移して近江中納言と稱をうる柳江州ハ佐々木
の元祖左近將監成頼宇多院天皇五代の後裔なる
う始て佐々木庄ゟ住をしまり以來その子章經近
江國の押領使となりその子經方近江國總追捕使
となりその子李定父ゟ續て追捕使とありその子
秀義相續てゟられゟ任しその子定綱近江國の守護
職となりう次男經高三男盛綱四男高綱備前安藝周
防因幡伯耆出雲日向七ケ國の守護職と賜ゝり五
男義清六男嚴秀とてありけるうち定綱の子孫二

流とつゝと近江國と二つに分て江南は六角江北
へ京極と稱しける六角は定綱十二代左京大夫
義賢入道拔閑齋承禎十三代右衛門督義弼父子信
長公と戰ひ利を失ひ終に江南の禄を捐て牢人し三
州へ落行しかとも信長を憚りとゞまりてあるを
扶助しゐらるゝ甲斐國へ行て勝頼をたのみ居たり
しかとも勝頼亡ひしかはまた処々漂泊しけるうちに
信長公御事あつて天下秀吉公に從ふ時となりけ
るにより義弼の弟近江守義定秀吉公へめされ懸
命の地を賜はりける秀次卿權中納言にして近江
守を兼ねへ義定を中務大輔に改めらる

流布本に佐々木屋形義秀は篤實の人なりとも
幼少より病身にして國のことに與らゝず六角
義賢入道義禎一人して國政を專にするゆへ
靈陽院義昭卿の御頼とも受奉らひしかとも信長
のために深く疾まれ承禎父子終に國を敗るに
いたる屋形義秀は公方家に隨從をこゝろと常に
思ふまゝにしかとも承禎父子我意にまかせて一向
に屋形の意に從はさるを註方なくありけるに
義秀と秀吉とは懇志を通をまゝ舊交にして
義秀に男子一人あると秀吉公扶助ありて三方
石余の地をあたへらるといへり佐々木屋形と

いへい六角京極両家の外にあるにあらず六角大膳大夫高頼永正十七年八月廿一日卒去但嫡子近江守氏綱ハ永正十五年七月九日父に先たつて卒をしにより二男の相國寺に吉侍者とてありけるを呼むかへ家督とす是彈正少弼定頼の子義賢即承禎なり其の子義治初ハ義弼といふ永禄四年父義賢隱居義弼家督となり同十年隱居廿三歳なり其蹟ハ弟近江守義定なり然るに江州志賀郡坂本雄琴村の地下人澤田武兵衛といふものの子に源内といふものあり江源武鑑といふ書を偽作し高頼の子氏綱の子に義實

といふありその子と義秀といひその子と義郷といひ其子と六角兵部氏郷といふに氏郷即源内なりとの説偽説なること前にもいへり讀者の惑ふことなかれ

根來の衆徒等一揆籠城の事

并秀吉公紀州進發の事

秀吉公そもそも内大臣に任じ三公に列しにより付て熟思ひ廻らさるに我尾州愛智郡中村の民間に生れたれハ土民の中に生涯を送り鍬を取て出來秋を樂むにさ身あるに故右大臣殿の御恩ふかく士とあつるたる等輪に超たる福分と人

もおのゝ我身もおのゝひつるゝいつゝろ物頭とふう城主となり十万廿万の田地を領し終に一國二國の主とあうそれらう五位に叙し四位に昇り三位を經て今は正二位の貴に至り官は内大臣に陞る抑内大臣は大織冠鎌足公よりゝ藤原鎌足公のゝち久しゝ絶たりしと光仁天皇の御宇藤原良繼藤原魚名等ゝられに任じるのひそれらう後連綿なりいそや天下泰平四海静謐の謀を一日もゝゆゝ開くゝとて四國九州へ使者を下し私欲のために隣國の塊をおう他の所領を奪ひ己の知行を増う如き濫妨を止め騒動を静め各々上洛して朝恩を報ぜんこと仰出されゝうとも海陸三四百里を隔てゝへ往還たゆをうゝゝゝ秀吉公の武名を聞とゝへともいまゝ一面の交ふさ徒い天下の主将必定ふの人なゝんとおのひふうらもるゝ上洛し誰に就て面會を遂んと不審に思起しゝ上るのに多めゝゝ四國の長曾我部元親へ再三の使節を受ふうゝ明白の返辭ふゝ元親ゝゝめ織田殿に從ひゝ身ふう何とて織田殿の本意を繼て天下を泰平に治めんと云秀吉公に伏從をさるゝゆとゝへへ強ちに秀吉公の武威を嫉むといふもあゝゝ

又自立と企てて秀吉公と余所ならるるものゝ
多く土州長曾我部元親へ其身健なる志雄しく軍の
こちらなるゝ方へ
たゝし者う阿波の三好讃岐の香川伊豫の河野
等の歴々と追落し四國を大形切取たりしを織田
殿聞食伊豫讃岐と獻して元親阿波土佐両國を領
以て朝廷へ奉公を盡さへさ由御下知ありける
ゝ元親御請申ゝ織田殿明智う為へ弑をゝ
あひ〳〵ゝへ其事無音なりけるゝと今度秀吉公へ
う織田殿御下知の通う早々二國を獻しさへて故
右大臣殿御法の如く仕へる由御使を以て仰下

されける元親何とうおのひけん御請延引しけ
るゝう度々催促有しうとも元親堅固田舎人へ
て四國うゝ外へ廣き処もなく我身の武勇へふう
ふのの絶て世間へあるまゝと我意一つへゆゝ
て秀吉公とも輕々とおのひ侮う元親昔の身へて
あるゝゝいさも有へゝ今ハ四國の大將ありたと
ひ信長存生へて云々と宣ふともたゆもとく仰へ従
ふへゝとも覺えびいとんや秀吉といふへ信長の
草履取へう成出て木下藤吉郎又ハ羽柴筑前守ふ
とこいひゝのなのうそれう左様へ申とて畏入ひ
とへ誰う申へさ實や猿の子とうゆ世へう申あう

木下と云へも羽柴と申をへも猿の縁うとおもと
なりなうと云てけるとハ使者もあさてゝ立うゝ
其由と申をしうハ秀吉公聞食元親左様なる不當
人とハ思食さうしうゝ然ハ御勢と差下され御征伐
あるべけるとも多つ近國と悉く平均してさて後
のとたるべゝ因て紀伊國退治あるべゝ彼國むう
し河内和泉と共ゝ畠山管領基國の子國あうしゝ
基國十代左衛門督昭高の時天正二年家臣游佐河
内守政賢といふの謀叛ゝて昭高の居城河内國
高屋城ゝおゝしのと合戰ゝけるハ昭高うあてゝ自
殺ゝて城ハ即落たりけるその〳〵ち此三國ハ蓬の

如く亂とけるうち紀伊國ゝハ熊野の神領或ひハ
高野山の衆徒根來法師あと何も冨饒ゝ任さて我
意たるゝ眞言秘密灌頂の靈場ゝ弓箭と貯へ甲冑
と弄ひ刀劍と試む王命と忽諸ゝ武威と蔑如と金
銀財寶と以て諸牢人と招き田畑山野と占て游觀
榮耀の処とひ是ゝ就て近里遠境といくゝ郷民の
内ゝ腕とさそう肘とくるゝの悉く是ゝ附順と一
揆の如ゝ信長公大坂の本願寺と攻るハゝ時も紀
州一揆の加勢あうしうハ本願寺毎度勝利と得た
うゝなう是ハうとおもさる守護の無故あるハとて
秀吉公の弟秀長卿と以て紀伊國守と定められた

つけるよろう秀長卿より根来へ使者を遣らし僧徒の行狀を正し新義の密教を奉持し法燈の遠く耀うんことを專といふこゝ武備を捐その家ゝもあゝぬ鉄炮を停止をへゝと申遣らしつゝとい根來法師大より憤り何といふて僧徒の行狀を正しくゝて武藝をとゝとゝ夫我山ハ覺鍐上人の遺跡とゝて上ハ康治のむゝより今より至て四百四十餘年の星霜を經ゝとも國司守護の進退をうけゞ七十六代の御宇より百七代の御代まて三十二代の聖主賢王更より四至境内の内を監梅をゝ然ると秀長とい何のゝ未聞とゝの頃成出て世を彼

是と沙汰をる秀吉の弟とゝ云うあゝ勿体ゝ置ねゝと云て使者を追出しゝる由を秀長より言上しゝとい秀吉公以の外より怒らをゝ惡ひ法師原の口のさゝ様や畠山の時ハ所領とも減をゝと祈禱修事料も多分より奪らゝとい思らゝ四百余年守護不入といひ三十二代王法より料理せゝとゝと云法師の今として偽を吐忘語戒をたうせゝ他の領地を掠奪して竊盜戒をゝ合戰闘諍の域よゝて殺生戒を行し飲酒邪婬の両戒ハ朝暮より犯しゝてゝ破戒無慙の根來法師是を禁めゝい王政も武威も二ゝあゝ廢絶をゝ如

〻速〻發向〻〻と是を踏潰をつ〻と定められ〻〻
〻う先鋒の大将い大和大納言秀長卿副将い近江
中納言秀次卿あう相從ふ侍大将い堀久太郎秀政
長岡與市郎忠興蒲生忠三郎氏郷長谷川藤五郎秀
一高山右近大夫長房筒井伊賀守定次中村孫平次
一氏蜂屋出羽守頼隆以下三万余人と云う
甫菴本ふい天正十二年三月上旬秀吉十万騎を
率〻發向をし〻と副将い大和大納言秀長羽柴中
納言秀次あう然るい根來寺雑賀中とて岸和
田の並ひ千石堀積善寺濱の城三ヶ処要害を相
拵へ逸物の弓窺竟の鉄炮をあつめ籠込軍勢往

來の自由と妨ひ〻る是ふ依て千石堀の押へい
秀次積善寺の押へい長岡兵部大輔父子蒲生忠三
郎濱の城をい中川藤兵衛尉高山右近等押へる
ひう筒井順慶長谷川藤五郎堀久太郎都合一万
五千三月廿日未明ふ根來寺さ〻て打ける云々
とみ
秀吉公もふ〻御出馬あう黒田官兵衛尉加藤虎之
助福嶋市松蜂須賀彦右衛門尉片桐助作平野權平
等七万余すて三月廿日大坂を首途あう泉州の賊
徒ふの由と聞秀吉自身來ふとい幸のことふいて一
あて當て我々う武藝のわとと見知をんとと岸の

和田よ打て出千石堀の要害よゝ山内三郎大夫高
柳監物平井傳左衛門高松東内西郷平内大夫天井
濱左衛門津屋孫九郎あとゝ雑賀の一揆と大将
として一万余人根来の悪僧杉本坊岩崎坊あとゝ
馳加りて五千余人なう濱の城よゝ雑賀の一統鈴
木土橋津屋原一万余人積善寺よゝ根来法師那賀
の郡のの共一万五千余人とて秀吉公いうゆて
泉州へとう發向のとゝ
根来すても有勢の衆徒武勇の牢人多く此三所へ
さゝ向ゝとう然るよ秀吉公ハ長岡蒲生よゝ積善
寺へ向て軍をゝ千石堀へゝ秀次と大将とゝて

中村長谷川蜂屋と向られ濱の城へゝ堀秀政高山
右近とさゝ向るゝ但急ようるゝ攻へゝ
と下知ゝるゝゝ秀長卿よゝ手勢一万余人よ筒井定
次三千余人御旗本衆二千余人とさゝ加へ一万五
千余人すて根来の本坊へ發向をゝめ黒田蜂須賀
両人よ一万余人とさゝ添三ケ所の出城の兵とも
の落る道をさゝへ切止むゝゝと下知ゝるゝゝ千石堀
濱の城すてゝ秀吉公の弓ちうへ根来本坊へよゝ
る由と知さうけるよ積善寺すてゝとゝ知大よ
驚ささてゝ秀吉よ計られたう本坊よゝそう敷
のゝゝ居あゝゝ老僧兒ともの外ゝ地下人百姓の

老たるのゝうなり何とて秀吉の猛勢と防く
べきやいなやと此処ととゝ根来ふ還り入敵
と防くべきとて殘る二ケ所よ牒合をんとそれ
とも寄手をさ間ふけるといそしもうふとゞ然とて
徒よ日と送るべきよあゝゞ我等ともうすとも寄
手と打破う本坊へとを帰う秀吉の勢の後ろう切
うるべきと評定一決然いゆうて打出へべと
その用意とうなり

重修眞書太閤記十編巻之五終

重修眞書太閤記十編巻之六

根来寺衆徒退散の事
并後藤又兵衛尉基次の事

天正十三年三月紀州雑賀并よ那賀郡の一揆二万
余人大和大納言秀長の領分泉州岸和田城よ中村
孫平次う籠り居たると十重廿重ふ取巻入替く攻
掛たり孫平次い世よ聞えゝる勇士ふり弓鉄炮の
足軽を揃え散々ふ射さをたるい寄手いさゝろ疼
んて見えたる処へ驀直ふ突て出たると見て一揆
の大将鈴木源左衛門尉同孫市天井濱土橋以下一

今の大事と進み戰ふ間城方まゝ打負城中へ引入
けるを一揆付入よをとおめきさけんで攻付た
さうよ火矢を放ちけるよりうゝ外構の柵いとや打
破らるゝたりさるゝとも中村軍ハ功者ゆゑ小荷駄の
ためよ立飼置たる雜役馬二三十疋と乘馬五六疋
一時よ切てとふ〳〵跡よりう急よ扣き立〳〵うハ馬ど
も刎廻り狂ひまはりけるを見て是よ就らるゝとと
一揆等騷動し備うこゝるまとまるゝび左右をるう
ちよ日既よ暮けるゝハ明朝あを攻破らめとて一揆
ハ勢を引上たう大坂まとハ此由を聞と其まゝ秀
吉公数万の大軍を率ひ七里の処とのうよのあて

岸和田へ入るゝ夜明ぬるハ一揆ともいで當城を
攻落をとへゝとて鈴木黨土橋山内西口高柳原天井
濱平井的場佐武高松打越津屋高佛和歌東家根來
の杦本坊岩室坊那賀郡の者とも相加らりて二万
余人たゝ一時よ乘破るゝとおめき叫んて攻うゝる
処よ城の氣色何とやらん昨日よりとりて覺ゆる
そと一人うゝへでまさ一人勢もりさうて見えた
るぞあの旗馬印ハ荒手ゆるやと互ふ不審し三人
四人いつるゝもあやふゝ氣おゝるゝして進こうねつ
るその間よふりあふのさて見あゝれハ櫓の上ふ
見ゆれぬ武者采揮取て下知をるありさよ尋常の

者とハ見えず誰ゝやあらんといふうちゝ山内三郎大夫さつと見て是ハ何さま凡人あらざりけりハ秀吉あるへきさういつゝ城中ゝ勢加そろゝゝ相違あゝ今ゝ敵の模様と見てのちゝと少猶豫ゝける処と見とまゝ中村孫平次弓鉄炮と左右ゝ立て三千餘騎城門を開て切て出寄手あゝとみてとそや城中ゝうつ切出るつと云程なくあれ一番ゝ雑賀の者蒐合と散々ゝ攻戦ふ処へ城中ゝうて荒手千餘騎切て出根来の衆徒の五千ばかりすてゝ入眞一文字ゝ突たて切立ゝ扣えさる真中へ切て入ゝけるゝとゝ根来勢散々切負岡治兵衛坂東七郎次郎とい

郎ゝとい人ゝの死人の下ゝ埋らゝて夜ゝ入て息出ゝうへ這々迯て帰りゝとなり右て根来雑賀の者とも城中ゝ秀吉入ゝひゝと聞て然ハ雲霞の大勢ゝるへゝ容易ゝ陥とゝうさゝと思ひまつ吾陣と堅ゝそのゝちゝ敵とい攻ゝと云ゝと去積善寺ゝ根来の衆徒千石ゝ四十餘町引堀ゝ雑賀濱の城ゝ那賀郡のゝの共屯とゝうて居るゝと秀長秀次両卿ゝ責さを秀吉公ハ引違ふて根来の本坊へ押寄ける由と積善寺ゝ籠りける根来の衆徒等聞ゝう寄手の有様と伺ひゝるゝ長岡與市郎蒲生忠三郎四千余人と以てあゝ寄備とう

備居為謀驚

ためて扣え居けるゆえ扨い我等と此処ゑ繋き置へき為の謀なるゑう攻掛らんともをび走ゑ爰ゑ備居るものなるへ然い此方ゑう總勢一同ゑ打立急ゑをきうして攻戰くく敵とも思ひうけなく驚きさわ敗走をんこと疑ひなく早く用意をゑとひしめき立い板本岩室の両僧とくくめ先生知ヒの若大衆得のものと引提五千余人面も〻ふ〻び門を開き一同ゑ切て出長岡蒲生の陣へ會釋もるくうけ入一同ゑ揉ゆふくんとそ働きける寄手の軍勢くくと見るのうとそのの敵い打出たり脱ヒまとうとうねて支度をし事なるこい驟雲の林と

出る如く塲廣ゑ出立をかへくこう中ゑも蒲生忠三郎思慮深きものなれい根來の者どもゑの〻ゑ武藝とたのくく切て出寄手を一時ゑ追散さんところるゑるへ然らい城中い定めて空虛なるへ引違つて城中へ乘入へと下知しけるこい蒲生の兵共打出たりし兵士ゑハ目もうけぞ差違へ城の中へ入んとゑ長岡ゑ寄手の者も是と見て我劣らじと馳ぬけくく進こけるゑと根來の衆徒い元ゑう戰と好まゑ只切ぬけぞやと思ふのこなるこい寄手の城ゑ入んとそるとと見て暗ゑ悦ひゑこ幸のこなう此隙ゑ馳ぬけくやと思ふい後ゑ氣の付さるふう

しと真一文字よりけ通りけるゝ寄手ハ元こゝり城
より入と専となり〳〵ハ其うちより衆徒ハ飛ゝ如く
雲と霞と走たりける寄手城より入てこゝるより衆徒一
人もあらされハ長岡蒲生大より憤りさてハ衆徒より
欺うれぬるゝ口惜やと跡と慕ふて追ゆけと衆徒
既より遠く切脱て影も見えぬ衆徒ハ長岡蒲生とた
しぬさて城と棄こゝるゝ落のひけるより敵数多道
と塞さけるゝ驚さよく見ハ黒田官兵衛蜂須賀
彦右衛門根来の衆徒の帰路と討んと構たりしか
ゝ衆徒大より仰天〳〵と大膽不敵の悪僧ともか
ハ日頃の勇氣ハ今日のるとゝ死の狂ひより狂

ひよとれハ黒田蜂須賀ゝ手の者ゝ〳〵と立て隊伍
定よ〳〵それ此間ゝと衆徒ハ一方打破うとゝ
馳走んとなりけるゝと黒田ゝ手の者手ぬけくせめ
たりしかハ根来法師の中より關紀豪澤と云二人
の悪法師踏止りて手痛く働さけるゝより黒田
蜂須賀の勢も疵と蒙りあるひハ討死ゝ〳〵ハ此
二人より〳〵ふをうれ〳〵根来法師大うゝハ退てけと然
るゝ黒田ゝ手より後藤甚太郎基次今年のゝる元
服しと又兵衛と名乗ゝの二人の法師と目よりけ
て切ゝ〳〵ハ豪澤關紀ゝと見て勢高けれと骨
ハよゝ固よ〳〵但汝ゝ心の剛より我等より向ふわさ

しさう相手をそやとおめへとも法師の身よハ
情あり首ハ汝よ預るそといられて又兵衛もうそ
となり舌の柔うあるよまうをて左様のことを申う
あそこいふ退そといふまうよ關紀よ向ひ二尺三寸
の大身の鎗上段下段をさまなく追つまうう川突
合けるう又兵衛いうるもして両人のうち一人と
仕留んと馬を躍を走ううる關紀豪澤ハ歩立あう
ふうて後藤う馬の脚と薙けるハ馬ハたまらず倒
るけう又兵衛早業世よ勝るつるハ下立あうう投
突よ突るて關紀ハ太股を突貫るる尻居こうと倒る
と起るも立ん押うつて首をとる豪澤ハ黒田勢

と戰ひ居たうけるう關紀ううこれると見ること其
まう走寄後藤を討んと大長刀と水車よ廻るて立
ひるる後藤ハ豪澤と見返う關紀う往生と羨て
死よ來るうあう珠勝やと鎗取直ん傍うう毋里太
兵衛つと拭うて切うるいうよ又兵衛其方ハ
あまうよ大食あるぞやさのうきることうあと
ハ太兵衛よ讓うるへといられて又兵衛大よ笑ひ
此頃不食う繼さて故坊主首ふるとて取たるそや喰
あまて御邉よおまきと云そて猶も向ふへ稼さ
行豪澤ハ後藤を伐んとおのひるうとも毋里よゆ
つうて走去たう毋里とても嫌ハの敵よあう孫とも

闕紀う敵を打ゆゝし殘念なりと氣とゝのゝち母里と引手よ引請つゝ三尺七寸の大長刀拂ふて薙や石突のはゝてはうゝる手練の早業太兵衛は大太刀振うさけ以て開けは鶴の翼さうさゝと打は車の輪左よ向てまつて切は右よ付入早速の達人雙方名と得ゝ武藝の名譽ゝよ目さまゝゝく見えゝよけて勝負付はゝう合て無手と組くむと其ゝ捻合力是とうゝとつと響き合押はうゝゝきは開きまゝゝは揉合たうゝよ豪澤は大力あり太う内まて勢高ゝ終よ太兵衛とあゝ伏をて首とうゝんと腰刀とさつけるよはつゝう鞘口ゝゝとて

刀はなゝ太刀は投棄手まはゝ押殺さんと咽よ手とうけあゝけると太兵衛は小男なれとも心利たるものなよは豪澤う肋とつゝゝ蹴こうけるよゝう少ゝ疼んて見えけるは澤と討たうけり此二人の戰ふひまよ根來の衆徒本坊さゝて引返ゝ

大納言秀長卿根來寺へ押寄る事

并秀吉公謀畧の事

天正十三年三月廿日未明よ秀吉公の御勢十万余根來寺さゝと發向ゝ先鋒は大納言秀長卿相從ふ侍大將は伊賀國主筒井侍從定次あり其勢都

合一万三千餘人とかや根来ゟてハ秀吉の大軍押寄ると聞て大きに驚きしハ如何にとくさ衆徒の内まて身健に心剛なるものハ積善寺の城にさし向たれとハ本坊まハ歩行たゝに心に任せぬ老僧なるひハ碩學耆宿なんとゆハれて物の用にたゝバ又ハ兒同宿なとさかしく名乗とも更にそろくしかしびそれに従ふ百姓一揆五千餘人とハいへとも備もたゝびく何としても世に聞えたる秀吉と防くべきと戦さぬ先より知ときられとも範如蓮達雲海なといふ荒法師ともちとも恐とと老僧に打向ひ中けるハ是まて當山へ敵の寄来りしも度

度なれとも終に一度も寺中へ入しことなし是併毘盧遮那如来の本土なるゆへ高祖大師祖師上人の擁護によれり然ハ今度とかへとも更に恐しきこともなくびく我等三四人ハ敵に向ひて弓矢鉄炮を取へし碩學老僧達ハ本尊及ひ不動明王ゟ法敵退散勝利調伏丹誠を凝して祈りあへと云ふめて若大衆ハ甲冑を帯し弓箭を取根来の塊に柵結て待居たりこうくそるうちに寄手雲霞の如く鬨の聲と上しかハ天地に響きそおひたゝしなとゆふも愚なり大和河内の勇士負を盡して向ひしことなとハ鉄炮を放しかけ矢叫ひをなし責かゝる寺中まて

も小勢なれバとて玉薬の用意ハあり鉄炮ハ根本當山より傳えつる藝にてあれバ名人上手も多かりけれバまた大木大石を投かけ〳〵なんと先途と防ぎける辰刻のはじめより午刻まで寄手入替〳〵息をも継ず攻けれバ衆徒等も一世の大事と身命をおしまず力をはげまし骨を砕て防ぎしかどに矢玉に中りて疵をかふむる寄手頗る多かりしかバ大勢とハいへどもたやすく責入がたく時刻を移しけるを秀吉公御覧有て即時に旗馬印を巻て攻あぐみし体にもてなして引退きたまふと寺中の大衆きゝて見て危もあらぬへし先もあらんやなと云

つる如く吾山ハ大日如来の本土なり不動明王の浄居なり秀吉如きが勢何十万にて寄るとも如来の慈眼明王の縛の縄にかゝりて進退ともになるべきやそれ追掛て皆殺しにせよといふまゝにおそわじ運達雲海なといふ者どもその大衆二千餘人鉄炮の筒先をそろへてつゝとおめいて走りかゝれバ寄手の兵士何もあはてまどひ取ものも取あへず逃らる大衆いよ〳〵力を得てこゝや寄手ハ亂立たるぞ追や〳〵と隊伍もそなへどもしら〳〵なつと根来の坂を驀直にくだりしハ大納言秀長卿時分へよきぞそれ返せや大かくべしは返せやと下

知しるべへい先鋒一万五千餘人面もふ〳〵取てう
〳〵衆徒と取込引たゝ〳〵一人も餘さずと切てお
うる蓮達雲海おれと見て然い寄手みたくう見し
そ大勢に取こめられてへうるゝ〳〵も引返し
柵のうちに入て防げやとくへい大衆いつまも仰
天し斯て山に我山まて引こめうこのうゑんいゝ〳〵も計
らひしそや口惜やといゝふわこもあらをゝ大和勢
あめこさてうゝ〳〵い根来の衆徒立足もなく敗走し
爰の谷蔭〳〵うの山道たゝう求めて逃らゝ又
い窮て道あさ処に行うゝうをんうゝとあさに腹を
切人もあう寄手い関と作うゝけ〳〵付入に付入に

と急に追うひ揉たうしうへ蓮達雲海両人もゝく
てい如何とあのゝ切命とそゝく防〳〵其隙に
其方共へらや引入て柵戸とゝめ力と盡して能戦
へやと教訓し寄手に向て待うけたうゝねそこう
是等二人い世に聞えし大力ふう身丈六尺七八寸
肥ふとうて腕ふも膚高く物具したる其間
の赤く黒ゝとゝ見しい門に立たる二王尊のゆ
るさ出〳〵如くなう寄手の中ゝう黒皮の鎧着た
ふ武者只一人進ふうて大音聲にそれに扣えし両
人い根来にて第一の荒法師と覺えゝう庶追ふ獵
夫や凡木こる杣と相手の勇者にそゝうゝこゝう

痛〻天野源右衛門男へとゝろ〻小さひ〻と肝ふと
し加いふけ〻と太刀へ切のつて一打に打切て
呉んとと四尺くらうの太刀打ふり飛ら〻と雲
海得たりと長刀とつ取振廻し一薙に斬さ伏んと
踊りう〻と〻へ源右衛門足場〻〻〻て戰てんと請
太刀になりて引けるとと雲海とゝや天野へ弓足か
うとゝろ〻ろ得てまゝ長刀と取直し根來山の衆徒
のうちに閼伽井坊の同宿雲海とへ我車なり生國
淡路の源氏あり年つのりて三十五歳歸一法眼憲
海あり傳へたる鞍馬一流の劍法へ我ら〻対に誰
うある又長刀の秘術とへ飯篠長威の弟子常陸鹿

嶋の松本備前守に傳えてうれや天野源右衛門
と呼くれへ源右衛門ちとも堪えぬ男ふり歸一と
もいへ松本ともいへ我等へ武藝の系圖ふし勝と
以て第一とゝといひあ〻〻〻の大太刀と打ふり
打ふり切り〻と〻へ雲海白莞尓と笑て長刀と水車
に廻し切拂ふ左に右に塞つ開さつ七八十合そ戰
ふ〻されとも互に得たる名人達者ゆへ劣る
と見ゝとさうゝされとも天野へ小兵にて早〻〻
ひと〻へ踏あゝそ下と打たゝ一太刀に雲海肩を切
れてたぢろく処を天野得たりとまさ一太刀横に
拂へへ雲海ら脇の下六七寸上さまに切込ゝろ痛

手おれハをこ〳〵もたまらぐ地を響ヤ〳〵て倒るゝ
を天野さかさんヤけようて首打落し太刀を貫き
只今まて鬼神の如き雲海を天野源右衛門ゝ打た
るぞと呼されハ蓮達肝を潰し〳〵ろかく〳〵とやおも
ひけん柵戸より内へ走入逆茂木引て防さけり寺
内ゝハ老僧とも本尊の前ゝ居あまり降魔の利剣
と振て佛敵秀吉と誅しあへと丹誠をあ〳〵ける
処ゝ寄手引色ゝ見えつるとといひ〳〵ハそや
霊験と顯〳〵るハそやといつもの汗と流して
祈念しける処ゝ寄手大返〳〵ゝ返して雲海うこれ
しゝハ衆徒ゝさカをたとして本尊の前ゝ身をか

けうちて祈るゝとゝ申刻ゝとうゝ寄手ゝとうゝ
騒き立〳〵ハ何事やらんと見る処へ杉木岩室の
両坊主帰り来りたゝ衆徒大ゝ力と得て是も明王
の加護あ〳〵んと喜ひ勇ゝ猶も本尊をあ奉りけ
る又ゝの杉木岩室の両坊主積善寺と出し時ハ五
千餘人あり〳〵とも処々ゝ討とるゝ三千餘
人ゝとやり〳〵爰ゝ帰り来り見ゝとも寄手十重
廿重ゝようゝ居たゝハ入ゝさ様あく〳〵をん
とためらひけるゝと秀吉公御覧ありて先鋒へ仰遣
くさるけるハあとゝ見えし勢い根来法師の積善
寺ゝの落来るゝのあるへしあとゝ支えハ味方そ

〻〻〻討るへ〻道を開てくやく寺中へ入〻むへ〻とあり〻〻へ秀長卿實のとあのくれ陣を左右へ分中を開て通されし〻へ岩室枚本の両坊主大よろこび速よ寺中へかけ入たりけらてだよ強勢よ防さ居たる処るう三千餘人の荒手加こりの れへ龍の雲を得虎の風よ志さかふ心地〻て勇むとそ〻めただ〻〻秀吉公この者共を外へちらさ〻び根來寺内へ集め置只一時よ打ちさきんとの謀と後みぞ出もひ〻〻〻〻

重修眞書太閤記十編巻之六終